

北海道の児童文学

— 黎明期・昭和期戦前 —

柴村紀代

一 児童文学のはじまり

児童文学すなわち「子どものための文学」が成立するためには、「子ども」を独立した人格として認める社会認識が必要であった。フィリップ・アリエスの『⁽¹⁾子供⁽¹⁾の誕生』が指摘したように、「子ども」という存在を認めるようになったのは近代に入ってからである。日本でも明治維新以前の封建時代は、子どもは単に領主・地主の付属物であり、子どもの生殺与奪の権利はすべて親にあった。明治維新により、教育の重要性が認識され、一八七二（明治五）年学制が公布され、一八七五（明治八）年には学齡が満六才から一四才と定める教育体制が整っていく。この学校制度の出版に合わせて、子どものための雑誌が次々と生まれて来た。作文を志す少年の投稿誌として「^{（えんさい）}穎才新誌」（一八七七・明治一〇年）が生まれ、やがて、文学、学術記事、修養記事などを盛り込んだ総合雑誌「少年園」（一八八八・明治二十一年）が創刊された。

児童文学としては、一八九〇（明治二三）年、大日本教育会の募集で入選した三輪弘忠の「少年之玉」が子どものための児童文学としての最初である。一方、民間に広く流布したのは、巖谷小波が「少年文学」全三二巻（博文館）の第一編として出した創作「こがね丸」（一八九

一・明治二四年）である。小波は「こがね丸」の文体を文語体とし、江戸時代からの戯作や講談調を取り入れ、内容も犬の仇討ち物語という古い道徳観ではあったが、その読みやすさが多くの子ども達に受け入れられ、当時のベストセラーとなった。

明治を代表する出版社である博文館は、一八八九（明治二二）年「日本之少年」を創刊後、巖谷小波を主筆に迎え、それまでの「日本之少年」等の雑誌を併合し、明治二八年「少年世界」を創刊した。巖谷小波は、当初子どものための読み物を「少年文学」と称していたが、その後「お伽噺」という名称を用い、「日本お伽噺」「世界お伽噺」として、内外の昔話や名作をいち早く紹介した。

二 巖谷小波と口演童話

巖谷小波（一八七〇（明治三）年―一九三三（昭和八）年）は東京都生まれ、本名季雄。父は近江国水口藩医で維新後高級官吏となる。小波は当初医学を目指し、七才からドイツ語を学ぶが、明治二〇年、硯友社に入社。尾崎紅葉らと知りあい、文学の道へと進む。博文館の「日本之少年」の創刊に関わり、その後も「少年文学」叢書、「日本昔噺」第一編「桃太郎」（明治二七年）を発行、明治四一年には「世界お伽噺」一〇〇冊を完成させるなど、児童文学の草創期を代表する作家として「日本児童文学の祖」とも言われる。

『日本口演童話史』⁽²⁾によれば、巖谷小波が口演童話を始めたのは、明治二九年京都旅行中、ある小学校校長に「お伽噺の口演を」と頼まれたのが始めたという。その後、明治三一年大日本婦人教育会の依頼で家庭講演及びお伽噺口演を行い、以後、毎月一回学院女学部及び幼稚園の生徒にお伽噺口演を行ったという。明治二八年一月から近衛師団経理部勤務の久留島武彦が巖谷家に同居、博文館は久留島を巡回講演部主任に任じ、明治三〇～四四年まで、小波と武彦がコンビを組み、北海道は旭川まで口演に歩いたという。（ただし、現在まで新聞各紙でこの時期小波が北海道に口演に来たという記録が見つからない）

巖谷大四『波の聲音―巖谷小波伝―』（新潮選書 昭和四九年）によれば、北海道への口演旅行は一九二三（大正二）年八月が最初で、以後、大正六年九月、大正七年八月、大正一三年八月、昭和四年八月はこの後、はじめて樺太に口演旅行へ行ったという記述がある。

当時の新聞「北海タイムス」に來道の記事がある。それによると大正六年九月一六日小樽にて小学校二つと夜、電気館で講演し、九月一八日は札幌の女子尋常小学校で三〇〇〇人の女子の前で講演したとある。その記事に「四年前よりいくらか老けて」とあるので、大正二年に來

札したことが確認できた。

『日本口演童話史』には、以後、大正時代にかけて口演童話が流布していく様子を次のように紹介している。

明治期に基礎が出来たお伽噺の口演は、大正に入っていよいよ活発な発展をして、大きな都市には「お伽倶楽部」ができ、大正七年頃から「お伽噺」は「童話」と呼びかえられるようになって、童話口演は益々盛んになり、各地に童話研究会ができ、全国の師範学校にはほとんど童話研究部が持たれて話す童話の研究をやり、各地の児童文化団体主催の童話大会が日曜ごとに開かれ、当時「童話」と言えば読む童話ではなく話す童話を指したものであった。巖谷小波、久留島武彦の流れを汲む、いわゆる童話家という人たちが現れて、童話の口演をして巡るようになった。

三 来道の口演童話家と各地の童話研究会

三―「童話研究」から

この項については、大正時代に出された雑誌「童話研究」⁽⁴⁾に各地の童話会のこと書かれているので、まずそれを確認したい。
「童話研究」誌について滑川道夫は次のように述べている。⁽⁵⁾

「童話研究」誌の創刊（一九二二（大正十一年））のころは、大正デモクラシー思潮を背景とした童心芸術運動が成熟期を迎えつつあった。すでに巖谷小波、久留島武彦、岸部福雄の三大口演童話家を頂点とする口演童話の興隆がめざましく、各地に子ども会や童話会が結成されつつあった。（中略）これらの受け皿としての機能を果たしたのは、いわゆる大正期自由主義教育とよばれる子どもの個性・創造性を尊重する新教育運動であった。

日本童話協会はまた日本童話会を組織し、各地に支部を置き、その活動を活発に支援していた。この「童話研究」にも「童話会消息」という欄が設けられ、各地の童話会・子ども会の消息が記されている。以下北海道関係を拾う。

- ・ 一巻二号（大正一一・九・一五）室蘭の宝玉童話会 創立以来お話を二三回、童謡会を一回行った。
- ・ 一巻三号（大正一一・一一・二〇）室蘭の宝玉童話会 高橋綱三郎校長の賛同で開催。

・二卷三号（大正一二・七・五）松美佐雄、大正一二年六月より北海道講演旅行。

・二卷四号（大正一二・八・五）〈会員消息〉巖谷小波氏、朝鮮の講演旅行より帰京、北海道方面へ赴かる。

・六卷一号（昭和二・一・二〇）旭川童話研究会が加盟。〈会員加盟〉札幌 小野三男治

・六卷三号（昭和二・五・五）〈会員加盟〉札幌 三浦一

・六卷四号（昭和二・七・一）「北海道童話会印象記」（内山）憲堂居士

北海道は元来童話の盛んな処であつて、童話会の如きもかなり古い歴史を持っている。

小樽にはグリム童話会というのがあつて、全道の最古のものとのこと。札幌の師範には桃太郎会と青い鳥童話会がある。青い鳥童話会は三浦一氏が幹事。札幌の小学校の先生たちが集まつて子供之友社を組織。一五日、子供之友社と桃太郎会と青い鳥が合同で小生の歓迎童話大会を開いてくれた。

・六卷四号（同）〈通常会員〉北海道 稚内小学校桃太郎会。〈支部新設〉札幌師範学校内青い鳥童話会幹事三浦一氏の尽力により、同校内に本会札幌支部が新設せられた。

〈地方委員推薦〉札幌 三浦一

・七卷二号（昭和三・三・二）〈支部消息〉函館…本会函館支部主催の下に二月一九日午後一時より元町公会堂でお伽大会開催、聴衆千名非常な盛会であつた。

・七卷六号（昭和三・一一・五）〈支部通信〉札幌支部…先に久留島先生、阿倍（季雄）先生を迎えることの出来た私たちは更に本部理事樫葉（勇）先生を迎えることが出来、市内苗穂、山鼻、東、豊平、桑園、江別の各小学校への講演やラジオ放送を行った。

・七卷六号（昭和三・一一・五）第二四支部 雨竜童話協会（会員七人）支部新設

・九卷四号（昭和五・四・一）オテントサン童話会…函館に三つの童話会。児童芸術座、巴童話会、オテントサン童話会。オテントサン童話会は月五回程度、第一回が紀元節に幼稚園児六〇〇人。

・九卷六号（昭和五・六・一五）函館オテントサン童話会…同人海老名禮太、天野源太郎、蛭子英二、野呂、西村、片平諸子の奮闘を賞賛。

海老名禮太は司会、口演などに活躍。

札幌支部便り：小川格氏を中心に座談会を開く。

北海道支部役員：海老名禮太Ⅱ函館女子高等小学校、オテントサン童話会幹事、雑誌「函館の小学生」委員、「北海詩戦」主宰。倉吉新次Ⅱ函館市住吉小学校、函館支部長。小泉忠雄Ⅱ夕張郡由仁村、由仁尋常高等小学校。塚本長蔵Ⅱ札幌市山鼻小学校、札幌子供会友会同人、サッポロ童話会同人、塚本お伽劇団同人、三浦一Ⅱ小学校教員、札幌子供会友会同人、サッポロ童話会同人、日本童話協会地方委員。水島留吉Ⅱ商業、室蘭市カナリヤ童話会会長。山階哲城Ⅱ虻田郡俱知安町僧侶、北海道仏教日曜学校連盟理事

・一〇巻五号（昭和六・一〇・一）函館どんぐり童話会：札幌童話会と連結して、会を重ねてきた。六月二八日函館市民館講堂で童話大会開催、聴衆千人余。

・一一巻一号（昭和七・一・一）空知童話協会創立大会を開催。

・一一巻三号（昭和七・三・一）空知支部だより：空知童話協会が第一回童話懇親座談会を開催。

・一一巻八号（昭和七・八・一）夕張支部報告：夕張支部設立記念お伽大会を開催。

・一一巻一〇号（昭和七・一〇・一）夕張支部報告：鹿の谷小学校にて開催。

・一六巻七号（昭和一一・七・一）砥上種樹氏、今夏北海道タイムス社の主催で各支局講演講習会。函館、小樽、札幌、旭川、室蘭、帯広、釧路を巡演。

・一六巻九号（昭和一一・九・一）砥上理事、全道を風靡す。夕張、美瑛、芽室と上記七都市の支局が後援。

・一六巻一一号（昭和一一・一一・一）空知支部、創立五周年臨時総会

以上、大正一一年から昭和一二年まで北海道で如何に活発に子供のための童話会が催されていたかがわかる。特に函館には児童芸術座、巴童話会、オテントサン童話会、どんぐり童話会。札幌には札幌師範を中心に桃太郎会、青い鳥童話会、子供之友社。小樽にグリム童話会。室蘭の宝玉童話会、カナリヤ童話会。その他、旭川、稚内、雨竜、空知、夕張に童話会があったことが確認できる。

三―二 道内の口演童話家たち

上記の道内の童話会に『北海道の児童文学』の和田義雄や坪谷京子の記述⁽⁶⁾やその後の谷暎子の研究⁽⁷⁾を加えると、札幌の「桃太郎会」が大正

八年、久留島武彦の口演童話に啓蒙され誕生し、飯田広太郎や小野三男治が活躍し、やがて大正一三年に師範の童話会が「桃太郎会」と「青い鳥童話会」に分かれると、塚本長蔵、三浦一らが参加し、昭和四年に両者が合併し、「札幌童話会」となった。「北海道の口演童話の三巨頭」と言われた小野三男治、塚本長蔵、三浦一の語り口は三人三様で、「小野は講談調、塚本は落語調、三浦は純粹な童話らしい童話」を語ったと言われている。やがて、昭和四年「七つ星童話会」（田中政之）も出来、昭和一〇年ころは「アカシヤお伽会」も加わり、あたかも百花繚亂の盛況であったという。戦後、師範学校は教育大学に代わり、教育大学札幌分校は「札幌童話会」が「銀の船童話会」になり、旭川分校は「小熊童話会」、函館分校は「赤い鳥童話会」、釧路分校は「まりも童話会」、岩見沢分校にも童話会が出来たという。旭川には他に佐々木明の「旭川童話会」もあったとある。

これらの童話会の中心的人物について、もう少し詳しく述べたい。

飯田広太郎（一八九四（明治二七）年二・一六―一九五四（昭和二九）年七・一五）根室市に生まれる。一時帯広近郊で代用教員をしていたが、明治四四年札幌師範学校に入学。大正四年卒業、釧路市の尋常小学校訓導（現教諭）として赴任。大正五年札幌師範学校訓導として転任、在職一二年を過ごす。昭和三年札幌市桑園小学校校長、一五年北海道庁視学、二一年北海道社会教育協会主事、二七年札幌市教育委員会初代委員長、二九年死去。

北海道教育大学の岡屋昭雄の資料⁽⁸⁾には、詳しい年譜と共に、飯田の綴り方教育論が紹介されている。飯田は芦田恵之助の綴り方教育の影響をうけてそれを深化させ、その後も国語教育の研究を通して北海道の国語界をリードしてきた存在であった。また、児童雑誌「北の子供」⁽⁹⁾では子ども達の投稿原稿の「文章」欄選者として創刊号から終刊まで担当した。

小野三男治（一九〇四（明治三七）年五・五一―一九七九（昭和五四）年七・九）夕張生まれ。大正九年札幌師範学校入学。学生時代、一九一九（大正八）年創立の「桃太郎童話会」に参加。「七つ星童話会」（田中政之）にも参加、その機関誌「七つ星」に童話を発表。昭和二年、札幌師範学校を卒業。この年、開設されたNHK札幌放送局で「子供の時間」に出演。その後、札幌童話会に参加。「北海道話道連盟」（一九三三年）「札幌話道倶楽部」（一九三七年）を結成、戦後には「札幌子供の友会」（一九四七年）を結成、各地で公演する。著書に実演童話集『かくれんぼ』⁽¹⁰⁾（一九三六年）がある。

塚本長蔵（一九〇六（明治三九）年―一九八一（昭和五六）年・一〇・一九）留萌市生まれ。昭和二年札幌師範学校卒業。一九二四年、学生

時代「青い鳥の会」、その後、一九二九年有志と「札幌童話会」を結成口演活動を行う。札幌市内の小学校に勤務、その間、NHK札幌放送局のJOIK子供会を主宰、二一年以降、藤女子短大に出講。戦中、東京が空襲に会い、出版社や印刷所も壊滅的な打撃を受けたため、戦後の一時期一二七社を越える出版社が札幌で活動を行った。画家や作家の疎開も相次ぎ、特に戦前「講談社の絵本」や「少年倶楽部」で活躍していた梁川剛一が札幌に来たことで、北海道での絵本作りが可能となった。梁川剛一はそのころのことを北海道新聞に次のように語っている。⁽¹⁾

藤居準一という紙屋さんが軍放出の紙を大量に抱えていて、共同で子供の絵本をつくらないうという。退職校長や現職の学校の先生、また地方の学校を廻って講談調の教育講演をして歩く塚本長蔵さんという人も仲間にいて「エルム社」という、まあ出版社をつくったんですね。

(傍線筆者)

エルム社(代表者藤居準一)の絵本は、現在一九冊が確認されており、梁川剛一の絵に対し、塚本長蔵の文の絵本は一二冊、また、紙芝居「アラジンのランプ」(一九四八年九月)「ウィリアム・テル」(一九四八年九月)の文も塚本であった。

三浦一(一九〇八(明治四一)年一二・一一―一九八一(昭和五六)年一・一九)は、小樽市生まれ。大正一三年札幌師範学校入学と同時に「桃太郎会」に入会、毎週のように市内のお寺の日曜学校で口演童話を演じたという。学生時代、塚本長蔵らと「青い鳥童話会」を結成。「札幌童話会」にも参加。前述の日本童話協会の札幌支部幹事としても活躍した。昭和三年札幌師範学校卒業後、苗穂小学校を皮切りに昭和二〇年まで札幌市内の小学校に勤務。一九四六年、児童雑誌「北の子供」創刊号に「偉人に学ぶ ジョージ・ワシントン」他二編を発表。昭和四年、手稲中央幼稚園長。北海道立保育専門学校講師、北海道児童文化会会長、北海道国語教育連盟委員長。童話集『黒い朝顔』(自由建設社)童話集『白い灯台』(みやま書房 一九六八(昭和四三)年)を出す。

以上、道内の口演童話家たちの動向を述べてきたが、彼らのほとんどが師範学校の出身であり、在学中に童話会に入り、口演の仕方を身近に学び、また、久留島武彦の『童話術講話』(日本童話協会 一九二八年)等の理論書も研究したと思われる。師範学校を出た彼らはやがて各地の小学校で童話会を作り、口演童話を通して子ども達にお話の魅力を伝えていった。最初の児童文学の普及がまずこのような「耳で聞くお話」語りであったことは、物語のはじまりが、炉端で語られる昔話であったことと重なり、非常に興味深い。やがて、口演童話の語り手たちが語り手自ら童話を創る創作者となっていくのもまた必然であったろう。しかし、北海道で生まれた童話作家、童謡作家について述べ

る前に、師範学校出の教師たちが取り組んだ綴り方教育とその弾圧について触れておきたい。

四 北海道の綴り方教育と北海道綴り方教育連盟事件

四―一 木村文助と『綴り方生活 村の子供』発刊

綴り方とは現在の作文のことだが、明治の作文教育は実用文や美文を手本として書かせあらかじめ教師が設定した題を手本に沿うよう指導する形式主義的なものであった。大正に入り、教育にも自由主義的な空気が生まれる中で、東京高等師範学校付属小学校訓導の芦田恵之助（一八七三―一九五一 兵庫県出身）は、従来の作文教育にあきたらず、子供の生活の中から自由に題を選ぶ「随意選題」を提唱し、その実践例を「綴り方教授」（大正二年）に発表した。その後、綴り方教育は子ども達を取りまく厳しい現実の生活認識させ、子ども達自身の言葉で日常生活を認識させるものとして、生活綴り方運動が全国に広がりを見せていった。一九一八（大正七）年七月に生まれた児童雑誌「赤い鳥」（鈴木三重吉主宰）も自由教育論を唱え、三重吉自身が創刊当初から投稿作文の指導にあたり、「赤い鳥」一卷二号（大正七年八月）に「見たこと聞いたこと、あったことをそのまま書いた作文をよこしてください。何でもかまはず自由に書いてください」と新しい綴り方運動を展開した。これに北海道から応えたのが、当時亀田郡大野小学校校長だった木村文助である。

木村文助（一八八二（明治一五）年・六・二六―一九五三（昭和二八）年・一二・一一）は秋田県に生まれる。秋田師範学校卒業後、大正六年函館師範学校長の招きで来道、大正七年から大野尋常高等小学校校長となる。大正十一年「赤い鳥」八月号に大野小学校の新栄とよ（高等一年）の「櫓」が初入選する。以後、昭和四年まで綴り方五九編、自由画三五編が入選し、入選した綴り方を中心にあつた大正一三年謄写版刷りで「綴り方生活 村の子供」を発行。その後、昭和二年に東京文園社から『綴り方生活 村の子供』が発刊され、その序文に鈴木三重吉は「田舎の子供の綴方は田舎の土に咲いた花である」と賞賛の言葉を寄せている。⁽¹²⁾

木村は『村の子供』を出した翌年、大野小学校に転任させられ、その後渡島管内の日新小学校を歴任しながら、生活綴り方の模索を続けていった。その綴り方理論を、道内の国語教育者の研鑽の場として大正一五年に創刊された「国語と人生」⁽¹³⁾に、木村は「児童文集『村の子供』の誕生」（六号大正一五年三月）や「綴方二十年」（八・九号大正一五年五・六月）を書いている。

四―二 道内における生活綴り方運動の広がり

北海道綴方教育連盟結成のきっかけは、坂本亮が、「綴方倶楽部」(千葉春雄編 一九三五年)に載った子どもの綴方「ナット売り」(小笠原文治郎(後松田)指導)を読んだことからであった。⁽¹⁴⁾

坂本亮(一九〇七(明治四〇)年一二・二七―二〇〇七(平成一九)年六・二三)は昭和二年、札幌師範学校卒業。厚岸小学校に赴任。昭和四年、父母の住む釧路の第四尋常高等小学校(現旭小学校)に転任。ここで作った学級文集「ひなた」は子ども達自身が文集の印刷、製本までする学級経営の方法が全国的に高い評価を受けた。坂本はまた多くの実践記録や論文を全国規模の雑誌に投稿し、全国綴方実践人の葉書によるコンクールでは最高点を取るなど、その実践は強い教育改革への熱意に支えられていた。⁽¹⁵⁾ 子ども達への児童詩や綴り方指導にも熱を入れ、「赤い鳥」や「綴方倶楽部」に作品を送り、入選している。昭和八、九年ころ、綴方教育の先駆者である木村文助を校内研究会に、野村芳兵衛を釧路市内の教師の講演会に呼んだりした。

昭和一〇年五月、たまたま目にした「ナット売り」の作品に感動し、これが坂本をして北海道綴方教育連盟を結成させることとなった。函館常磐小学校尋常四年の菅原奈々夫が書いた「ナット売り」は、出稼ぎ中の父親の不在の中、兄弟で初めて納豆売りに出かけた様子が、その恥ずかしさや兄の暖かい言葉などと共に素直に書かれていた。その夜、坂本は小笠原に長い手紙を書き、仲間にも呼びかけ、昭和一〇年八月七日、札幌で北海道綴方教育連盟が結成され、地域責任者として、道南に小笠原文治郎、道西に吉岡一郎(師範学校で坂本の一級上)、道北に小坂佐久馬、道東に坂本亮、網走地区に小鮒寛を決め、釧路の坂本宅に事務所を置き、機関誌として「綴方林」(経済的理由で二号で閉刊)を出すことがきまった。翌日、同人は教育界の先輩たち(当時大通り小学校校長の飯田広太郎、札幌教育界主事の森善次、雑誌「北海道教育評論」の編集主宰をしていた石附忠平)を訪問、連盟を作ったことを報告した。石附はその後、「北海道文選」の発行や同人の評論掲載など協力を惜しまなかった。「北海道文選」は、昭和一年八月、野村芳兵衛、国分一太郎らを招き、七〇〇人の参加者を集めた講習会で綴方教育の大衆化運動として発刊を決めたものだった。「文選」は北海道教育評論社で発行され、昭和二年一〇月から一四年一二月刊まで第一五号を数え、監修者に飯田広太郎、石附忠平があたった。また、一〇年千葉春雄を、一一年「工程」の百田宗治、一二年には波多野完治を各地区の費用分担で招いている。

四―三 北海道綴方教育連盟事件

治安維持法が成立したのは、一九二五（大正一四）年、普通選挙成立との抱き合わせのように施行された。その後、大正一五年社会科学連合に所属していた学生が逮捕された京都学連事件、昭和二年北海道のマルクス・レーニン主義者の集産党を検挙した集産党事件、昭和三年の共産党の全国大量検挙の三・一五事件と治安維持法は猛威を振るっていく。そして、昭和一五年二月の東北地方の生活主義教育関係者の逮捕に続き、北海道でも同年一月二一日、当時釧路市東栄小学校の訓導だった坂本亮、女満別小学校の小鮎寛、根室の厚床小学校の横山真が逮捕され、その後昭和一六年一月一〇日、全道五〇人超の生活綴方の関係者が逮捕された。この事件の全貌は前述の平澤是曠よしひろの『弾圧 北海道綴方教育連盟事件』に詳しい。それによると昭和一六年一月の「特高日報」には「北海道綴方教育連盟を中心とする所謂『生活主義教育運動』関係者の第二次検挙」の見出しで（前略）北海道綴方教育連盟の中心人物はほとんど共産主義者にして、これら関係者の実践しつつある所謂生活主義教育はマルクス教育理論の巧妙なる偽装なること明瞭となりたるをもって、本月十日以降関係者五十二人を検挙し目下嚴重取り調べ中なり」とある。昭和一七年一月二二日、関係者の公判が開始され、昭和一八年六月三〇日判決、坂本らは懲役二年の判決を受けたが、この時点で坂本はすでに逮捕から二年七ヶ月が立っていた。

四―四 入江好之のこと

北海道綴方教育連盟事件で逮捕されたひとりに入江好之（一九〇七―一九八九）は小樽市生まれ、旭川師範学校を出た後、旭川日章小学校に勤務、教え子たちの詩集「少年」を刊行するなど学級運営などにも熱心で、北海道綴方教育連盟の中部同人の集まりにも参加、毎月の綴方作品座談会にも出席していた。昭和一六年一月一〇日に突然逮捕される。釧路刑務所に収監された後、昭和一六年七月に釈放されるが復職できず、一八年満州に渡りその後応召、戦後シベリアに抑留、五年後の二四年帰国する。入江は師範学校在学中から詩誌「北斗星」を発行、昭和二年第一詩集「あしかび」を刊行、早くから詩人として活躍していた。戦後は三二年北海道詩人協会の創立に参加、二〇年間事務局長として協会を支え、「北海道詩集」の刊行にも尽力した。戦後は自ら出版社北書房を立ち上げ、詩集「凍る季節」（昭和四三年）「ひとつの歴史」（五一年）や少年詩集「花と鳥と少年」を刊行した。

北海道の児童文学との接点は昭和二七年設立された日本児童文学者協会北海道支部の会員として、最初の作品集「原っぱ」にも参加、また

自社の北書房から「むかし話北海道」(全五巻 日本児童文学者協会北海道支部編 一九六四―一九八〇年)を出している。昭和四三年北海道文化賞受賞、晩年は横浜に転居しその地で亡くなった。

五 北海道における宮沢賢治受容

五―一 更科源藏と宮沢賢治

宮沢賢治が亡くなったのは一九三三(昭和八)年九月二一日、三七歳の若さであった。生前はほとんど知られることのなかった賢治だったが、詩人として賢治の詩の良き理解者であった草野心平、高村光太郎らの手によって早くも一九三四(昭和九)年には「宮沢賢治全集」(全三巻)が文圃堂から出ている。

更科源藏(一九〇四(明治三七)年―一九八五(昭和六〇)年)は弟子屈町字熊牛原野の開拓民の九人兄弟の末子に生まれる。一九二一(大正一〇)年東京麻生獣医畜産学校に入学。一九二三(大正一二)年関東大震災で学校を中退し帰京。一九二五(大正一四)年詩誌「抒情詩」に四位入選。一九二八(昭和三)年上京、高村光太郎を訪ね、詩誌「至上律」⁽¹⁶⁾を編集。一九三七(昭和五)年詩誌「北緯五十度」⁽¹⁷⁾創刊。五月、弟子屈村の屈斜路湖尋常小学校の代用教員となる。更科源藏と宮沢賢治との接点はこの詩誌「抒情詩」入選のときである。この新人推薦号の一位は金井新作、二位真壁仁、三位伊藤整、四位が更科であった。このときから真壁仁との交流が始り、両者の往復書簡が残っている。「北緯五十度」には真壁仁、草野心平らの寄稿があり、また「宮澤賢治研究四」(宮澤賢治友の會 昭和一〇年発行)に更科は「釧路での宮沢賢治の会」という題で釧路で開かれた賢治の追悼会の模様が報告されている。この会で賢治の「グスコブドリの伝記」が朗読され、更科は賢治の追悼会に出席した時のことを語っている。また「北緯五十度」一一号(昭和一〇年)には発刊間もない「宮沢賢治全集」の広告が載っている。⁽¹⁸⁾

なお更科源藏の戦前の児童文学関係の著書としては童話集『北の國の物語』(大鵬社 一九四四年)、絵本『夏ノ無カタ北國』(北方出版社 一九二六年)があるがここでは触れきれない。いずれ戦後編でまとめて取り上げたいと思う。

五―二 小田邦雄と宮澤賢治研究

小田邦雄（一九二二（明治四五）年―一九六五（昭和四〇）年）本名正夫、祖父母が江別に屯田兵として入植。大正一三年江別小学校を卒業後、北海中学校入学、昭和四年卒業。江別町役場に一時勤めるが北海道庁に移り、北海道大政翼賛会の主事となる。江別の詩人・坪松一郎や加藤愛夫と親交深く、宮澤賢治の話は坪松一郎から聞いたという。¹⁹花巻の宮沢家を訪れ、弟の宮沢清六氏とも会い、宮澤賢治論を書くよう勧められた。²⁰『宮澤賢治覚え書』（好学社 昭和一八年）には、農民芸術家としての賢治を高く評価し、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という賢治の「農民芸術概論」の言葉を引用しつつ、賢治の精神を「万葉精神を継ぐもの」として万葉歌人とのつながりを論じている。時節柄それは皇国史観にもつながるものでもあった。東京での大政翼賛会の会合で高村光太郎と一緒にあった小田は高村光太郎の「この時局に宮澤さんが生きて居られたらこの席にみえられてみたでせうに」の言葉に「祖国の危急存亡の秋、東北の一隅の誠実な魂が惹起する一面は私にも肯定されるものであった」と述懐している。敗戦後の小田による賢治研究は農村の青年向きの伝記として昭和二五年江別市の酪農学園通信教育出版社から農村文庫の一冊として出され、自分たちと同じ農村建設者として描かれている。これはその後『宮澤賢治―作品と生涯』と改題され出版、三二年に『宮澤賢治―詩人の自己形成について』が出されている。

五―三 八森虎太郎の『税務署長の冒険』出版

八森虎太郎（一九一四（大正三）年―一九九九年（平成一一）年）岩手県花巻市生まれ。花巻農学校卒業後、日本大学卒業。戦前から与田準一の主宰する「チチノキ」に参加、東京が戦災で印刷工場が壊滅的な打撃を受けたため、戦後、詩誌「日本未来派」を主宰、北海道麦酒配給統制会社（後のサッポロビール）に勤務のかたわら発行をつづけた。また、その縁で一九四九（昭和二四）年宮澤賢治の『税務署長の冒険』を発行した。ペンネームの八森も花巻の地名八森（はちもり）に由来する。賢治が「税務署長の冒険」を書いたのは一九二三（大正一二）年で、当時酒の密造が盛んだった東北地方の実情を背景にしている。戦後、北海道でも密造酒の製造販売が盛んで、北海道濁酒密造防止協力会が出来、昭和二三年に発行された『税務署長の冒険』はここからの発行である。八森虎太郎は発行にあたり、宮澤清六氏の許諾を取り、B六版一一四頁の体裁で「氷河鼠の毛皮」「宮澤賢治先生について」を加え、定価七〇円で発行した。²¹

六 終わりに

今回は、北海道の児童文学通史として、明治から昭和戦前までを概観した。北海道の児童文学が活性化するのは戦後に入って、児童文学雑誌や絵本が発行され、昭和二十七年に日本児童文学者協会北海道支部が発足、また石森延男が『コタンの口笛』（東都書房一九五七年）を出すなどやがて長編児童文学へと続いていく。この項については、また次の機会に論をまとめたいと思っている。

注

- (1) フィリップ・アリエス『子供の誕生』みすず書房 一九八〇（原書発行一九六〇）フランス語の原題は『アンシャンレジーム期の子供と家族生活』。学校教育制度を当然視する現代の子ども観に対して、中世の教育制度や家族生活が子どもを困い込まないのであることが、多くの図像や日記類から解き明かした画期的な書。
- (2) 『日本口演童話史』内山憲尚編 文化書房博文社 一九七二年
- (3) 日本最初の師範学校は一八七三（明治六）年東京師範学校。北海道では一八七五（明治八）年、函館に小学教科伝習所が出来、一八八〇年「函館師範学校」となる。一八八三（明治一六）年札幌札幌師範学校が出来、明治一九年には北海道庁函館師範学校、北海道庁札幌師範学校と名称が変わった。
- (4) 「童話研究」（日本童話協会）は一九二二（大正一一）年創刊、一九四一（昭和一六）年終刊まで全二一巻一五九冊がでており、復刻版が久山社より一九八八年にでている。
- (5) 滑川道夫「児童文化における『童話研究』の展望」（復刻版「童話研究」別巻 久山社一九八九年 p 九）
- (6) 和田義雄「児童文学の夜明け―開拓期から敗戦まで―」・坪谷京子「児童文化の足あと」（『北海道の児童文学』にれの樹の会 一九七九年）
- (7) 谷暎子「口演童話で活躍した三人の教師たち」（『占領下の北海道の子ども文化一九四五―一九四九』札幌市こどもの劇場 やまびこ座 二〇〇一年）
- (8) 岡屋昭雄「北海道国語教育史稿（二）―飯田広太郎の場合―」（『北海道教育大学紀要第一部C』三五巻一号 一九八四年）
- (9) 児童雑誌「北の子供」（新日本文化協会）一九四六年一月―一九五〇年一月。全三八巻 細目は谷暎子「児童雑誌『北の子供』解題（二）と細目」（北星学園短大紀要二七号 一九九一年）による。
- (10) 小野三男治「かくれんぼ」は、『日本児童文学大事典』の記載であるが、現在まで現物を確認できないでいる。
- (11) 梁川剛一・聞き手池川包男編集委員「私のなかの歴史 造形六十年」北海道新聞 一九八三・八・五―八・二〇（柴村紀代「梁川剛一の北海道絵本について」藤女子大学紀要 四七号 二〇一〇年）
- (12) 大野文化財保護研究会 木下寿実夫「生活綴り方の先駆者 木村文助」の年表による

また、木村文助の生活綴方については、小田切正「生活綴方の開拓者 木村文助」(『北海道民間教育運動史 上』復刻版 北海道民間教育研究団体連絡協議会 二〇〇五年)に詳しい

(13) 「国語と人生」国語夜話会機関誌。編集同人飯田広太郎、森善次ほか、大正一四年一〇月～昭和二年七月(二三号)終刊。

(14) 平澤是曠『彈庄 北海道綴方教育連盟事件』北海道新聞社 一九九〇年

(15) 岡屋昭雄「北海道国語教育個体史の研究Ⅱ」―坂本亮の場合―(『北海道教育大学紀要第一部C』三六卷二号 一九八六年)

(16) 詩誌「至上律」(更科源藏・編集 発行人・渡辺茂 発行所・釧路至上律社 誌名は高村光太郎の発案、第一次(昭和三年七月―四年一〇月全八冊)第二次(昭和二年七月―四年二月季刊全八冊札幌青磁社)第三次(昭和二年一〇月―二八年一〇月季刊全三冊 札幌至上律発行所)と発行した。

(17) 詩誌「北緯五十度」更科源藏編集 一九三〇年創刊、通卷一二号、一九三五年終刊

(18) 横田由紀子「賢治と北海道―「北緯五十度」との接点」(日本児童文学学会北海道支部機関誌「ヘカッチ」八号 二〇〇三年)

(19) 望月芳明『人間の詩』叢書江別に生きる五 江別市教育委員会 一九九四年

(20) 横田由紀子「北海道における宮沢賢治研究―小田邦雄『宮澤賢治覚え書』の考察」(日本児童文学学会北海道支部機関誌「ヘカッチ」六号 二〇〇一年)

(21) 柴村紀代「北海道での『税務署長の冒険』発行をめぐって」(日本児童文学学会北海道支部機関誌「ヘカッチ」一〇号 二〇〇六年)

〈参考資料〉

大阪国際児童文学館・編『日本児童文学大事典』一九九三年

にれの樹の会『北海道の児童文学』北海道新聞社 一九七九年

北海道文学館・編『北海道文学大事典』北海道新聞社 一九八五年

『北海道児童文学全集』立風書房 一九七九年